＜動向＞

難民問題への本学の取り組み―2019 年度―

打 樋　啓 史

本年度も昨年度までと同様、諸団体、関係者、ボランティアの方々のご理解とご協力のもとで、本学における「難民問題」の啓発に向けての取り組みを継続することができた。昨年度に続いて、人権担当学長補佐としてその窓口を務めた私から、ご協力をいただいた方々に改めて感謝を申し上げると共に、本年度本学で実施された取り組みの概要を記すこととする。

最初に、昨年度再開された「Meal for Refugees（以下 M4R と記す）」を、今年度も 11 月に神戸三田キャンパスと西宮上ケ原キャンパスで実施することができた。これは、学生食堂のメニューに日本で暮らす難民の祖国の料理を導入し、その売り上げの一部（1 食につき 20 円または 10 円）を「特定 NPO 法人　難民支援協会（以下 JAR と記す）」に寄付して日本で暮らす難民支援に用いるという企画で、学生たちが食を通じて難民問題を知り、それを身近にとらえることを狙いとするイベントである。

本学では 2012 年度から難民推薦制度を通じて入学した学生が中心となって JAR の協力のもと始められ、これが全国の大学では初の実施となった。今回は、神戸三田キャンパスでは従来のとおり難民支援サークル「J-FUN ユース K.G.」の学生たちが中心となって準備が始まった。西宮上ケ原キャンパスでは、昨年度、学生有志によって「K.G. Meal for Refugees @上ケ原」というチームが作られ実施されたが、今年度も同様に、社会学部生らを中心に学生有志十数名がこのチームに連なり、準備に着手した。

これら学生チームの主催、人権教育研究室の後援、関西学院大学生活協同組合の協力という体制で、学長室や広報室などの理解とサポートも得ながら全学的な支援のもとでの実施が可能となった。とりわけ、大学生協から西宮上ケ原キャンパスではフードサービス事業部の佐々木満部長、神戸三田キャンパスでは神戸三田キャンパス事業部の新井豊課長がこの窓口になられ、メニュー選定、試食会、広報、売上集計など、その都度学生たちの相談に乗ってくださり、準備から実施後まで丁寧に対応してくださった。また西宮上ケ原キャンパスでは、準備の一環として、10 月 7 日（月）に学生チームが 2012 年度に本学での M4R の発起人となった卒業生のテュアン･シャンカイ氏（ミャンマー出身）を招き、難民問題と M4R についての勉強会を行なった。以下が今年度の M4R の概要である。

・西宮上ケ原キャンパス
　期　　間：11 月 18 日（月）－ 22 日（金）
　場　　所：BIG PAPA、BIG MAMA
　メニュー：まろやかチキンカレーとナンのセット（月、火、水）
　　ビルマ風まぜうどん（木、金）
　　トマトソースの肉じゃが（全日）
　　パンプディング（全日）

・神戸三田キャンパス
期　　間：11 月 25（月）－ 29 日（金）
場　　所：第 1 厚生棟 LunchBox
メニュー：挽き肉のスパイシー炒め丼（全日）
スパイシーチキンカレー（全日）
トマトソースの肉じゃが（月、水、金）

寄付額の総計は、西宮上ケ原キャンパスでは 13,560 円（678 食）、神戸三田キャンパスでは 19,160 円（958 食）となり、各チームから JAR に届けられた。このように学生が主体となって難民問題に取り組むことの意義はたいへん大きく、次年度の継続に向けても相談が始められている。特に西宮上ケ原キャンパスでは、今回関わった学生チームの中から、「これをサークル活動として定着させたい」との声が上がっており、その準備が進められている。

一方、2016 年度から全国初の高校生による M4R を開始した本学院の高等部では、今年度は第 4 回目となる M4R が実施された。これまで同様「グローバル・リーダー・プログラム」に参加している 3 年生が中心となって、JAR ならびに大学生協フードサービス事業部の協力のもと準備が進められ、「世界難民の日（6/20）」に合わせた 6 月 17 日（月）から 21 日（金）の 5 日間、高中部食堂にて行われた。今回は「20 円革命～難民の現実（リアル）を知ろう～」をスローガンに、「チキンカレー（ナンとのセット）」と「タピオカのスープ」が特別メニューとして提供された。

授業に関しては、今年度も、西宮上ケ原キャンパスで開講の全学共通科目「『関学』学 1」（春学期）で、5 月 27 日（月）に難民問題を主題にして吉山昌氏（JAR 事務局長）をゲストスピーカーとしてお招きした。この他にも、西宮上ケ原キャンパスで、社会学部開講科目「キリスト教と文化」（春学期）の 5 月 28 日（火）の講義を、難民問題を主題として同じく吉山昌氏をゲストスピーカーにお招きして開講し、難民問題の現状についてお話いただき、その中で難民問題と宗教との関わりについても触れていただくことができた。

チャペルアワーでも、社会学部チャペルで春秋両学期に一回ずつ、ゲストをお招きして、難民をテーマにした「人権を考えるチャペル」を開催した。5 月 28 日（火）には吉山昌氏をお招きして「日本に逃れてきた難民の話」というテーマで、10 月 8 日（火）には前出のテュアン・シャンカイ氏をお招きして「日本で生きるなん民」というテーマでお話しいただいた。

また今年度も、本学在学生による要望と協力の申し出によって 2014 年度から始められた「UNHCR 難民映画祭」（2019 年度より、名称が「UNHCR WILL2LIVE 映画祭」に変更）への参加が行なわれた。これは、2016 年度から始まった新たな協力体制である「学校パートナーズ」としての映画上映会であり、西村愛子氏（UNHCR 駐日事務所渉外アソシエイト）をはじめ国連 UNHCR 協会の方々のご助言とご協力のもと、西宮上ケ原と神戸三田の 2 キャンパスにて実施することができた。概要は下記のとおりで、詳細は国連 UNHCR 協会のホームページに他校の実施報告と共に掲載されている。

「関西学院大学難民映画フェスティバル」
（UNHCR WILL2LIVE 映画祭 2019 －学校パートナーズ上映）

主　催：関西学院大学人権教育研究室
後　援：UNHCR 駐日事務所、国連 UNHCR 協会

【西宮上ケ原キャンパス開催】
日　時：2018 年 11 月 18 日（月）16:50 － 18:20
場　所：G 号館 201 号教室

【神戸三田キャンパス開催】
日　時：2018 年 11 月 21 日（木）9:00 － 10:30
場　所：II 号館 201 号教室

上映作品：『イージー・レッスン－児童婚を逃れて』
監督：ドロッチャ・ズルボー（ハンガリー／2018年／78分／ドキュメンタリー／日本語字幕）

この作品は、ソマリアで育った女性が児童婚を逃れるために15歳のとき単身でハンガリーにやってきて、ハンガリー語を学びつつ、高校卒業資格取得に務め、モデル業にも従事するなか、祖国で培われた宗教や文化についての価値観とのジレンマに苦悩する様子を描いたものである。難民となった若者がヨーロッパで生きる上での葛藤をリアルに描いた、本ドキュメンタリー作品を上映できたことの意義は大きく、西宮上ケ原キャンパスでは120名、神戸三田キャンパスでは280名という多くの視聴者の参加を得ることができた。

日本でも多くの人々によって難民問題に関する啓発活動およびその理解と協力に向けての努力が続けられている一方で、日本における難民受け入れは未だ進んでいない現状がある。法務省入局管理局による2019年3月27日の報道発表によると、2018年の日本での難民認定申請者は10,493人であり, 前年に比べて9,136人（約47%）減少であった。これに対する同年の難民認定者は42名で、前年比22名増となっているものの、国際的に見ればまだ極めて低い数字と言わざるを得ない（なお、難民認定されなかったが人道的配慮を理由に在留を認められた者が40名）。

また、国際世論も、無関心や道徳的無知によって「難民の悲劇に対する麻痺状態」に近づいていることが指摘される（Z. バウマン『自分と違った人たちとどう向き合うか－難民問題から考える』、青土社 2017年）。このような中で、本学における難民問題への取り組みは本当に小さな働きであるが、それを多くの方々のご協力とご理解によって今年度も継続できたことに心より感謝して、次年度以降もこの働きを地道に続けていくことの大切さを心に刻みつつ、今回の報告とさせていただきたい。